

2025年度講演会 報告書

2026年3月26日
一般社団法人山梨県情報通信業協会
ダイバーシティプロジェクト

2025年度、一般社団法人 山梨県情報通信業協会（以降YSAとする）のダイバーシティプロジェクトでは、「アンコンシャス・バイアスや外国籍・LGBTQを含む多様性の理解促進」を重点テーマとして取り組んでおります。その活動の一環として、専修大学 国際コミュニケーション学部教授 河野真太郎様をお迎えし、ジェンダー、アンコンシャス・バイアスに関する講演会を開催いたしました。当日の様子とダイバーシティプロジェクトメンバーの感想を掲載いたします。

開催日

2026年2月12日（木） 14：00～16：00

開催場所

山梨県立図書館 2F 多目的ホール
〒400-0024 山梨県甲府市北口2丁目8番1号

講師

専修大学 国際コミュニケーション学部教授
河野 真太郎 氏

講演テーマ

ポピュラー・カルチャーから見るジェンダーと無意識の思い込み
～職場や日常に潜む偏りを考える～

講演会の様子

当日は、多くの参加者にお集まりいただき、落ち着いた雰囲気の中で講演が始まりました。講師の河野様より、「リトル・マーメイド」をはじめとしたディズニー作品を題材に、ポピュラー・カルチャーにおけるジェンダーや多様性の描かれ方についてお話しいただきました。時代とともに、ジェンダーや多様性に関する常識も変化し、それに伴ってポピュラー・カルチャーに反映されるテーマも変化していることを学びました。また後半では、日常の中に潜むアンコンシャス・バイアスやマイクロアグレッションについて、具体例を交えながらお話しいただきました。自分の発言がマイクロアグレッションだったのかもと、自身の言動を振り返り、今後のコミュニケーションについて非常に考えさせられました。参加者にとって、大変学びの多い有意義な講演会となりました。ご講演いただきました河野様、ありがとうございました。

ジェンダー平等の“常識”が、時代とともに変化していることをあらためて学べた一日でした。

- ・ディズニー作品の例はわかりやすく、長きに渡り定着した“常識”を変え、人々に受け入れてもらう難しさを知ることができました。
- ・「機会の平等」と「結果の平等」の違いをイラストで学びました。“真の平等”について考えさせられました。
- ・アンコンシャス・バイアス⇒マイクロアグレッション⇒ハラスメントと連鎖していくことを学びました。“していない”と思い込まず、日常会話の言動で連鎖を発生させないために、冷静に会話する癖をつけていきたいと思いました。

どんなに細心の注意を払っても、どこかで無意識に偏見をし、誰かを傷つけてしまっているかもしれません。異なる思考や価値観を持つ者同士が、お互いを尊重し、受け入れるのは簡単なことではないと思っています。しかし、少なくとも相手を「否定しない」「傷つけない」道を選びながら、人とのつながりを大切にしたいと思いました。

今日より明日が、“誰か”にとって生きやすくなるための様々な気づきを得ることができました。本講演会は、とても有意義で素晴らしい内容でした。河野様、ありがとうございました。

「ポピュラー・カルチャーから見るジェンダーと無意識の思い込み」に参加いたしました。

私の職場は20代の若手と50代以上のベテランが中心で、世代間の価値観の差をいかに埋めるかが課題でした。

講義では、ディズニー作品の変遷からジェンダー平等の「常識」が変化してきた歴史を学び、良かれと思った言動が相手を傷つける「マイクロアグレッション」になり得ることが示され、深く反省させられました。「何も言えなくなる」と身構えるのではなく、これまで「何も言えなかった側」の存在に光を当てるべきという視点は、管理職として大きな気づきとなりました。

まずは自分自身のアンコンシャス・バイアスを自覚し、若手もベテランも互いに尊重し合える職場環境づくりに尽力してまいります。

今回は、私たちにとっても身近なカルチャーであるディズニーを通して、ジェンダーとアンコンシャス・バイアスについてご講演いただきました。

普段楽しく観ているディズニー作品にもフェミニズム（あらゆる性差別からの解放を目的とする運動）の影響が見られ、時代の移り変わりとともにキャラクター設定が変化しているのは、“ジェンダー”や“アンコンシャス・バイアス”の要素を除こうとしているためだと知りました。公開当初はこのような設定変更違和感を覚える人が多くいても、十年～数十年後には当たり前のように受け入れられているだろうと感じます。そのようにして社会の常識は変わっていくのだと思います。

常識が変化する過程では、社会という大きな枠組みと日常の些細な個人行動が相互に影響し合っているというお話に納得しました。

アンコンシャス・バイアスは無意識の思い込みであるため自分では気づきにくく、それが言動となって他者を傷つけ、ハラスメントにエスカレートする危険性があると知りました。だからといって何も言えなくなってしまうのではなく、マイノリティの人がいるかもしれないという前提で話せる能力を身につけたいと思います。また、誰かを傷つけるような会話の場に居合わせた際は「それはバイアスがかかっています」と指摘できるようになりたいです。そうした行動が常識を変えていくことにつながると感じました。

■ジェンダー平等

ジェンダー平等という言葉が常識化していると感じる場面は多々あり、私の職場でも十数年前は男性は〇〇職、女性は△△職が当たり前でしたが、現在ではすべての人に同じ権利、機会などが与えられ活躍の場は広がっています。

しかし、職場から一歩外に出てみるとまだそれほど意識は変わっておらず、日本が諸外国には届かない「性役割分業の残存」が多いにあることを痛感しています。

私自身も女性なんだからという言葉が幼少期より聞いていたため、片隅に偏った考えが残っているのも事実としてありながら、今までの常識を変えていかなければならないことを強く感じました。

また、目に見える性から見えない性まである中で無自覚に差別をしてしまっていたとしたら怖いことだと思いました。

■マイクロアグレッション（微小な攻撃）

アンコンシャスバイアスは良く聞く言葉ですが、マイクロアグレッションは初めて聞く言葉でした。

悪意はなくても、加害者は気づかないうちに相手を攻撃しているとは、本当に怖いと思いましたが、自分の行動を振り返ってみても思い当たる節がありました。

特に年齢・世代・美醜に関しては話に出やすく、良かれと思っていた会話でも、もしかすると相手を嫌な気分させていたかもしれないことに気づきました。

今後は自分自身の日常的なコミュニケーションから変えていきマイクロアグレッションにならないような文脈を考えながら会話する習慣を身に付けたいと思います。

そしてバイスタンダーになった時にもマクロレベル、ミクロレベルで変えていけるように意識したいと思います。

知っているようで知らないことは沢山あり、今回の講演会でも自分自身や周りのことを考える機会となりました。

ありがとうございました。

今回の講演会の中で、私が特に印象深く、心に残ったのは「リトル・マーメイド」のお話です。

2023年に公開された実写版のリトル・マーメイドで、主人公としてこれまでとは異なる肌の色を持つプリンセスが描かれたことは記憶に新しく、どうしても従来のディズニーアニメ版と比較されがちだと感じていました。このキャスティングに対しては、アニメ版のファンから多くの指摘の声が上がったというお話もありました。

私個人としては、エンターテインメントの中で多様な人々が描かれること自体に問題はないと感じていますが、アニメ版のアリエルに強い思い入れを持つファンにとっては、「できるだけ忠実に再現してほしい」という気持ちも理解できる部分があると感じました。

しかし同時に、リトル・マーメイドでこれまでとは異なる肌の色を持つプリンセスが描かれたことにより、ディズニー作品の中で「自分と同じ肌の色のプリンセス」を目にする機会が少なかった幼児から大人まで多くの方が、自分自身が物語の中心になれる存在として肯定されたと感じ、「嬉しい」と思ったというお話もあり、メディアの受け取り方は人それぞれであることを改めて実感しました。

このキャスティングについて、講演会に参加するまでは、時代の変化や、差別をしないという企業としての社会的なメッセージなのだろうと考えていました。

しかし、講演会を通して、その背景にはもっと複雑で、歴史や文化、表象の積み重ねが関わっていることを知り、決して単純な話ではないのだと感じました。

その一例として紹介されたのが、リトルマーメイドの原作がアンデルセンによる童話『人魚姫』であるというお話です。

原作の人魚姫は金髪として描かれている一方で、ディズニーアニメ版のアリエルは赤毛です。

私自身、これまでアリエルの赤毛に違和感を覚えたことはなく、むしろもし金髪だったとしたら、かえって違和感を覚えるのではないかと思いました。

(次ページへ続く)

(前ページからの続き)

しかし、アニメ版が公開された当時、海外では赤毛の人々が差別の対象となっていた時代背景があったと知り、驚きました。

私自身、赤毛に対して否定的な印象を持ったことはなく、アリエルの髪の色について深く考えたこともありませんでしたが、当時は主人公が赤毛であること自体に驚きの声が上がっていたのだと思います。

それでも、その表現が誰かの心を救っていた可能性があると考えれば、作品が持つ力の大きさを感じました。

今回、アリエルをこれまでとは異なる姿で描いたことが、今の時代では批判的に受け取られる場面があったとしても、時間が経てば当たり前のことになっていく、というお話がとても印象的でした。

物語は必ずしも過去の表現に忠実である必要はなく、どのような姿であっても、物語そのものが人の心を動かすものであればよいのだと感じました。将来、再びリメイクされる際には、アリエルが恋に落ちる相手や生き方の描かれ方も、さらに多様になっているかもしれません。

そのような変化も、赤毛のアリエルに違和感を覚えなくなったように、時代とともに自然に受け入れられていくのではないかと思います。

アニメーションは、子どもの頃から自然と触れるものです。

新しい価値観や認識を持つポピュラー・カルチャーに触れて育った子どもたちが大人になり、その考え方を「当たり前」としていくのだと感じました。いつか自分の子どもに、「その考えは古い」と言われてしまう日が来るかもしれません。

それでも、今この世界を生きづらいと感じている誰かが、少しでも生きやすくなる社会になれば良いなと心から思いました。

他にも、ジェンダーに関するお話など、非常に興味深い内容をたくさん聞かせていただきました。

河野様貴重なお時間をありがとうございました。

今回の講演会では、ジェンダーやアンコンシャス・バイアス、マイクロアグレッション等について、ポピュラー・カルチャーを切り口にお話しいただきました。

「リトル・マーメイド」を題材に、ディズニー映画はその時代の価値観やジェンダー、多様性が反映されているというお話を伺い、普段何気なく見ていたアニメや映画にも社会の変化が投影されていることを改めて実感しました。

また、社会の変化により「ジェンダー平等」が浸透してきている一方で、「男性は仕事、女性は家庭」という価値観が今も根強く残っていることにも触れられていました。制度や意識が少しずつ変わってきているように見えても、実際には社会全体や当事者自身が「そうすべき」「そうでないといけない」と思い込んでしまい、今までと同じ選択をしていることが多いように思います。

例えば、子どもの送迎や体調不良時の対応を「母親が担うのが当然」と考える人が多いことも、社会的な構造や「母親は家庭と育児を担うもの」という風潮によって、「そう思われている」のだと気づかされました。このような思い込みがアンコンシャス・バイアスにつながっていることを改めて感じました。

私は今回の講演の中で、初めて「マイクロアグレッション」という言葉を知りました。自分では褒めているつもりでも、意図せずに相手を傷つけたり、侮辱として受け取られてしまうことがあること、そしてマイクロアグレッションが積み重なるとハラスメントにつながってしまうことを伺い、気をつけていたつもりでも、過去の発言の中にマイクロアグレッションがあったかもしれない、と少し怖くなりました。

マイクロアグレッションを防ぐためには、相手の印象だけで判断したり決めつけたりするのではなく、丁寧にコミュニケーションをとること、そして「相手にどう伝わるか」を意識しながら会話することが大切であるとお話がありました。私自身、思ったことをすぐに口にしてしまうことがあるため、相手の立場や背景を想像しながら、「この言葉は相手にどう受け取られるだろう？」と立ち止まって考える習慣を身につけていきたいと思います。

今回の講演で学んだことを、日常のコミュニケーションや業務に活かしていきたいと思いました。ありがとうございました。

講演会の様子

